日本医史学雑誌　第67巻第1号（2021）　128–130

第121回日本医史学会のオンライン開催を終えて

志村　俊郎

第121回日本医史学会実行委員長

新型コロナウイルスの収束が，未だ見られず会員の皆様にはご不安とご心配が絶えない毎日と拝察致します．本稿では従来の本学会の開催様式とは異なるオンライン開催の概要を含め報告します．第121回日本医史学会は，会期を2020年12月19日・20日に延期してオンライン開催とし，大会長弦間昭彦日本医科大学学長，実行委員長志村俊郎日本医史学会理事で行いました．オンライン期間は，12月19日より12月28日までと長く致しました．

弦間昭彦学長の大会長講演，坂井建雄先生の日本医史学会理事長講演，弘前大学松木明知先生の特別講演，福岡整形外科病院小林晶先生と日本医科大学山本保博先生の教育講演，志村の基調講演，また4名の各権威からのシンポジウム講演そして作家柳田邦男先生の市民公開講座は，以上，一部を除きビデオ収録とし，82題の一般講演は，PDF閲覧（46題）と誌上発表（36題）でありました．会期中のWEB視聴人数は，全445名でありました（図1）．開催内容の詳細は，紙面の都合上日本医史学雑誌第65巻の第121回日本医史学会総会・学術大会開催案内と第66巻第2号の総会

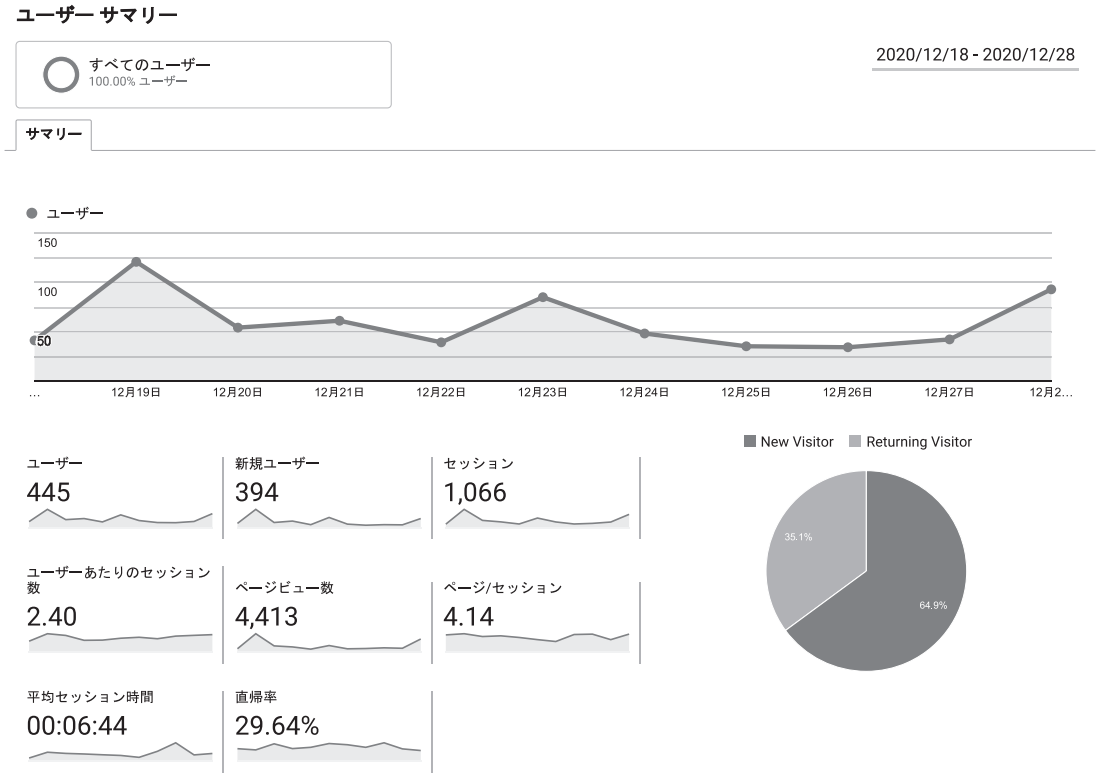

図1　第121回日本医史学会　視聴ユーザーサマリー

抄録号をご参照頂きますが，弦間昭彦大会長講演は，坂井建雄理事長の座長で「多くの偉人を輩出した日本医科大学の前身の済生学舎と本学関連史料」を済生学舎から続く140年有余の長い日本医科大学の歴史と本学同窓会館ともゆかりが深い明治の文豪との関連やスクリバ文庫について話されました．坂井建雄理事長講演は，小曽戸洋前理事長の座長で「現代医学のルーツはどこにあるのか」を演者近著の筑摩書房『医学全史』から西洋近代医学の科学的探究について話されました．シンポジウムの「医療史から済生救民を考える―長谷川 泰をめぐる人々―」では，長谷川 泰の恩師・知友との巡りあわせが社会に遺した，現代および未来にも通じる幾多の教え・言葉などを中心に，志村が基調講演として「庶民の医療における済生救民と長谷川泰」を，本学会の基調テーマである「済生救民と社会との共生」を主旨として話した後に，「順天堂第二代堂主佐藤尚中」を順天堂大学澤井直先生，「後藤新平」を日本医科大学藤倉輝道先生，「済生学舎卒業生の野口英世」を野口

写真1　第121回日本医史学会プログラム集

英世記念会森田鉄平先生，「北里柴三郎」を北里研究所檀原宏文先生から御講演を頂きました．市民公開講座では，座長は，弦間昭彦学長で柳田邦男先生に，「心に生きる日野原重明先生～30年余の豊かな学び，そして未来～」と題しお話しを頂きました（この収録ビデオは，日本医科大学ホームページの学長室だよりに放映されております）．

さて，オンライン開催にあたり，開催期間中に限り，セッションまたは演者への質問及び座長のコメントを投稿して頂ける質問・討論箱を設けたとはいえ，従来の会場討論までの深い議論が出来ず，会員の皆様に貴重なご意見をお伺いする場が出来なかった事を実行委員長として参加者の皆様に深くお詫び致します．しかし，医史学会で大切な一般演題は，PDF閲覧になってしまいましたが，各セッションの座長名を記載した従来と同じプログラム集（写真1）を作成する事が出来ました．また演者と座長だけのごく限られた少人数ではありますが学会集合写真（写真2）も撮れたのは慶びでありました．

写真2　弦間昭彦大会長と柳田邦男先生を囲む集合写真

これからもWith coronaの時代が続くことも予想されます．本学会が，オンライン開催を応用した場合の一つの試金石になり会員の皆様により良い本学会の運営を考える一助になれましたら幸いであります．最後に会員皆様のご協力と第121回日本医史学会のオンライン開催へのご参加に心より感謝申し上げます．